

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2010-9

発行日：平成22年10月29日

発行元：（社）計画・交通研究会

目次

Opinion	1
大学におけるプランニング教育とJABEE	
News Letters	2-5
事業報告・活動報告	
Backyard	6
事務局通信	

□ Opinion 大学におけるプランニング教育とJABEE 福田 大輔

昨年度まで二年間、若輩者の身でありながら大学で学科長の職を預かり、立場上、JABEEの受審に深く携わった。JABEEとは、日本技術者教育認定機構（Japan Accreditation Board for Engineering Education）の略で、工学教育プログラムの審査を行うNGOである。この機構の認定を受けた教育プログラムは、一定以上の質を確保していることが証明され、国際的にも技術者教育プログラムとして相互認証される。関連する土木工学分野、環境工学分野では、JABEEが開始した2001年から現在までの間に70の全国の土木系学科がその認定を受けている。該当するプログラムの卒業生は技術士試験の一次試験が免除されるというメリットもある。産業界においても、JABEEへの理解は向上しつつある。

JABEEでは、学科の全ての講義を事前に掲げられたシラバスに忠実に行う必要がある。講義の体系や評価方法が米国の大学のように厳密になってきたものの、その仕組みは、学生にも教員にも上手く浸透しつつあるようだ。実際、従来に比べて休講は無くなり、成績が厳密に評価されるようになったが、それに不満を言う学生はほとんどいない。講義内容について教育改善のPDCAサイクルの中で詳しく検討されることにより、教官同士も互いに良い刺激を受けている。教育に対する意識は確実に変化しており、全体的な質の向上につながっている。建設業の方々からは、「コンクリート、土質、構造などの土木工学の基礎科目など、従来は入社時点で知っていて当たり前のことを知らない新卒が最近が多い」とよく指摘されるが、JABEE的な教育の進展により、この問題は少なか

らず改善されていくであろう。

しかし、JABEEのシステムは、現時点ではメリットばかりではない。型にはめすぎることによって、教科書に書かれていない自由度の高い講義を組みにくくなるという懸念がある。JABEEの指針に従って、学習目標の明確化とその達成度評価、成績評価方法の事前通知、学生・卒業生からの意見の反映など、定型的に全体のカリキュラムや各講義が構成される。シラバスに講義内容が示されるため、講義とは直接関係のない脱線した話を行った時には、「シラバス通りにやっていない」と学生からお叱りを受ける。それを試験で出題したのなら、後日なされる授業アンケートで学生から厳しい評価を受けることにもなりかねない。その結果、カリキュラム自体が座学を中心とした構成にならざるを得ず、実践的な演習系講義の時間が少なくなるという懸念もある。

まちづくりや交通計画、都市計画などの分野は、四段階推定法のような分析・調査の方法論や、都市計画関連の法律的な知識など、型にはめて教授すべき内容も多い。一方で、まちづくりやPI・合意形成など、「実践」を重視することも、計画系の分野では必要である。このような課題に対しては、必ずしも「解」が存在しない「実践」を体験させ、プランニングやまちづくりには創造性が不可欠であるということを、学生に実感させる必要がある。JABEEのような仕組みが徐々に普及する中で、プランニングに関連する実践的教育をどう位置づけるべきかが、今後の交通・土木・都市の計画に関する専門教育にとって大きな課題と考えられる。

（東京工業大学大学院理工学研究科 准教授）

■第11回麴町サロン（国土について語る会）

（平成22年9月14日）

栢原英郎（社）日本港湾協会会長（当研究会評議員）より、『すべての海路もローマに通ず』と題して、海、海路、港湾といった視点から、古代ローマの領土、領海づくりも踏まえ、これからの日本の国土のありようについて話をされ、参加者との討論・会話をおこなった。

- ・ローマ帝国は、領土という意識より、国を治めるためのインフラづくりに力をいれ、ローマ式のソフト、ハードのインフラが整備されている領域が国土ととらえられていた。
- ・「全ての道はローマに通ず」という言葉は有名であるが、100万都市ローマを支えるため大量の小麦や家畜などがシチリア、アフリカ、エジプトから海路で輸送された。その輸送量を「小麦法」などから推量すると、小麦だけでも年間4-50万トンが必要であったと考えられる。これらの物資輸送は街道だけでは支えきれず、港湾機能も大きかったことが推察される。
- ・ローマ市内を流れるテベレ川の川岸に港湾遺跡が残されている。この港湾からテベレ川を下ること約25キロの河口部にオスティア港があったが、能力の不足をきたすようになり、紀元1世紀末から2世紀にかけてクラウディオ、トラヤヌス帝の時代にオスティアの北3キロ程のところに新港を建設した。2本の南北防波堤に囲まれた外港がまず建設され、漂砂、波浪を防ぐために次に内陸部に一辺が350mの六角形の泊地を持つ大規模な掘り込み港湾が建設された。今日防波堤や護岸の一部のほかに、六角形の池が完全な形で残っている。
- ・土木インフラの建設には長い年数を要するが、ローマ帝国では完成したときの皇帝などの名前がつけられるのでたとえ政敵の着手した事業であっても事業の継続性を保ちやすく、人気取りのためのバラマキ的な事業を防ぐことにもつながった。

参加者からも次のような討論が交わされた。

- ・インフラストラクチャーという語は近年NATOの空軍基地づくりの際に使われはじめたものであって、その語源をたどってもラテン語にはない。現代の経済学者はこれを社会資本（Social capital）というが、今の日本ではflowとstockが整理されずに議論されることが多い。
 - ・港湾の歴史を記す本は少ないが、近世になっても西欧では大きな港湾投資は続いていた。近世になって、仏の長大なミディ運河は港湾とも結びついて、食料事情が安定した時代に大量のワインや香辛料を内陸部に運んでいた。港湾を経由して何を運んだかは当時の交易・経済の構造を知る上で大切であり、近年のデータであれば、Atlas of History（Time社）にみられる。シェルブール、ルアーブルなどは大きな潮位差や津波に対応した大規模港湾となっている。
 - ・現代の大都市では、港湾につながる運河をさらに活用すべきだ。運河サミットが行われる野田市、中川、堀川運河を持つ名古屋市、富山（ふざん）運河のある富山市などでの試みのほか、利根川運河はエコロジカルコリドーとして期待される。韓国がかかげている、世界に向けての十大プロジェクト（V10）には、運河への投資案件も含まれている。
- 世界の大都市での再開発ではPort authorityが担う例が多いが、日本ではまだ少ない。
- ・港の風景は海上（船）からの目線も大切であって、桂離宮やハウステンボスでも工夫されている。護岸の消波ブロックも大事なところは自然石にすることはできないか。これからは、さらに空（飛行機）からみた風景も大切になるのではないか。
 - ・沖縄の活性化のために特区制度も実施されてきたが、まだ規模は小さくインパクトが小さい。アジアにおける地政学的な位置づけからして、船舶の便宜置籍の場とすれば、港湾をベースとした経済活動も活性化し税

収入も大きくなるのではないか。

- ・大学の講座に、国土計画論がない、あるいはなくなってきたのは憂慮されること。
- ・今春まで最高裁判所判事で行政法（土地法）を専門とした藤田 宙靖氏は、独の国土計画にも詳しく、見識をもった人として紹介された。

（文責 事務局 水野）

■2010年6月 計交研・当て塾共催セミナー （第Ⅹ講・第5回）

●日時：平成22年6月9日（水）17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光開発 その企画から計画まで（3）

●参加者：13名（うち計交研関係5名）

〔講義概要〕

◆観光企画（その3）

1 観光企画の概念

観光企画は、物・施設・地点・地・地域という単体から集合、規模の相違、及び個人・私設・公設・公開という公私の差がある。

私的な観光事業であれば企業体の創意工夫が中心となるが、それでも外部化（周辺への影響）が必ず発生する。それゆえ、第二主体（受地）の理解と協力がなくしては成立も成功もあり得ない。しかも、多種多様な態様が発生する。見方を変えれば、プラス・マイナスの波及効果が大きいと言える。よって、この4節が大切なのである。

4. 合意形成への接近

基本的には、“三方よし”（売り手よし、買い手よし、世に中よし）の鉄則が当然のこととして理解されねばならない。さらに、加える法則が、以下の項目である。

（1）情報開示

観光企画では、観光者と受地の理解を得るために以下の情報開示と工夫が必要である。

- ・内部化（提供するサービス等＝観光者への対応）と外部化（施設立地等＝受地への配慮）の明示・・・利益のみを優先しない。
- ・効用：受地の経済的効果（継続性等）、社会的効果（外部効果／用・強・美）
- ・自然・環境への影響評価（アセスメント）

・プレゼンテーションの工夫

（2）参加への誘い

観光関連産業は、生活行為が伴い、比較的時間が長く、裾野の広い産業である。それゆえ、地域づくり、まちづくりの哲学的（大義）な発想・構想が求められ、多様な分野の参加（もの・かね・ひと・しくみ・ところ）を促進する必要がある。

観光企画では、様々な文化や人材を調査して地域の活性化にどのように活かすかが重要である。言わば、オーケストラの指揮者のような役割が期待される。

（3）観光企画は楽しい

自然、歴史、文化の享受という観光の本質から当然とも言えるが、観光は人々に感動の場・機会を与えるものである。

このため、観光企画では、1日の有効時間の中での移動と滞留を繰り返し、感動の場・機会をどのように実現するかが重要になる。感動が冷めきらないうちに次の場面に移る、間を取る、起承転結がある、といった演劇と同様の演出が必要である。この企画は、企画者自身が楽しめるものでなければならない。

さらに、観光資源を持続的に活用していくことが重要で、“三方よし”の典型と言える。

（4）現場をよく見る（資源性の発見）

特徴がないと思われる地域の自然や文化も、ふるさとへの郷愁をそそる価値ある資源であることもある。周囲の環境と一体となることで価値が高まる資源もある。

このように、様々な観点から総合的に資源性を判断する必要があり、複数の分野の専門家が共同作業で取り組む必要がある。

・企画担当者の高度な力量が問われる。

・共同作業（仲間を組織する）

5. 1章のむすび 観光企画とは

以下の項目が取りまとめとなる。

- （1）産業全体の物的・時間的な洞察力
- （2）資源の育成的利用
- （3）計画・設計・実施・運用との関連
- （4）評価論への展開

時代とともに変わるもの、変わらないものがある。変わらないものが、観光資源になる。

その土地の固有性が重要であり、資源性と市場性を見極めた評価が不可欠である。

“三方よし”・・・われ、どれに“感動”を

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2010年6月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅹ講・第6回)

●日時：平成22年6月30日(水)17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

東京工業大学名誉教授 中村良夫 先生

特別講義：都市をつくる風景

●参加者：24名(うち計交研関係12名)

[講義概要]

□都市をつくる風景―「場所」と「身体」をつなぐもの(藤原書店、2010.5.30)

[目次]はじめに／第Ⅰ部 零落した山水都市／第Ⅱ部 伝統を継ぐ近代市民／第Ⅲ部 転生する山水都市

本書の第Ⅰ部は問題提起、第Ⅱ部は普遍化のヒント(市民感覚の重要性)、第Ⅲ部は将来に向けた課題・提案である。

本書で「風景」という言葉を多用したのは、場所の中へ景観を身体論的に拡張して、「受肉した知」として成熟させたかったためだ。こうして景観論は都市論に近づいていく。私自身に景観論と都市論を融合させたいという気持ちが前からあり、今回の本では「都市をつくる風景」としたのである。

第Ⅰ部の問題提起では、日本の都市の風景がどのようなものかをまとめた。日本の都市は秩序が乱れ問題点は多いが、都市としての多様性があり、捨てたものではないと思う。特に、社寺や民家、路地裏の植木までも含めた緑は残っており、水の気配も感じられるが、寸断され、荒んでしまった。こうした日本の都市を「零落した山水都市」と要約した。

現在の東京には、皇居をはじめ、幾つもの大名庭園が残され、モダニズム建築の足下に山水の残欠が散らばっている。しかし、物理的な緑や水はともかく、風景的な山水の優雅な香りは失せてしまった。この意味で「零落した山水」という言い方をした。「零落」に重きを置けば

荒んだ都市と言えるが、山水都市の遺伝子に目を向ければ希望はあるだろう。

都市の大義が廃れ、その風景が歪んだ理由は、二つにまとめられよう。第一は官民私それぞれに「イエ」共同態の殻が破れず、成熟した市民自治による、都市の戦略的統治能力が弱いことだ。第2は、近代都市にふさわしい、自然との公的な関係を結べなかったこと。

第Ⅱ部は西欧と日本の都市比較論である。西欧では国民国家よりも都市の歴史がはるかに古いのであって、土着的コミュニティの意識がすこぶる強い。

西欧の中世においては、市民が誓約団体をつくって戦乱に立ち向かい、封建勢力との確執のなかで、戦略性と民主的社交性にとむ決死の自治都市が育っていった。現在も、誇り高い土着的なコミューンが国民国家の基盤を成し、美しい都市や言語などの地域文化を守ろうとする意識がたいへん強い。

一方、日本の国家形態は、中国から律令国家型の集権制が導入されていらい、さまざまな理由で自治都市の芽は摘まれてしまった。明治になって西欧の国民国家を学び、デモクラシーを輸入したが統治力のある市民自治が身につかず、ナショナリズムの傍らで、リージョナリズムは影が薄い。

第Ⅲ部では、今後を展望した。風土性が強い欧州では、個性的な町が多い。こうしたアイデンティティの意識、土地に刻まれた歴史、地場の産業・経済や生活文化などライフスタイルの総体こそ風景を育てる土壌だ。

都市を生き、楽しむなかで、視点は移動し、場所と身体は結ばれる。場所(トポス)と身体そして象徴記号という概念を使うことで景観の概念を拡張することができ、これが風景となる。「ニワ自然態」ともいえる日本人の住まいの思想を近代化し、社会化しながら山水都市の伝統を引き継ぎたい。

物の集合体ではなく、記号をちりばめた身体の場合＝「身体場」として都市を考えると、日本の都市にも様々な面白さがあり、山水都市の新しい姿がみえてくるのではないか。

(文：中村良夫)

■2010年7月 計交研・当て塾共催セミナー
(第Ⅹ講・第7回)

●日時：平成22年7月14日(水)17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

- ①「当て塾」塾長 鈴木忠義先生
観光開発 その企画から計画まで (4)
- ②旅と観光研究室 溝口周道氏
言葉磨きによる観光の魅力づくりへのアプローチ

●参加者：15名 (うち計交研関係6名)

[講義概要]

◆観光企画 (その4)

Ⅰ 観光企画の概念

「Ⅰ 観光企画の概念」の目次構成について、「4. 観光企画の構成」を追加した。

4. 観光企画の構成

◇「学と術の分野」と「対象分野」で整理

観光の実践では、土木・建築・造園・経営等の他分野の成果を活用できることから、観光企画では「何を行うか」を明確にすることが重要である。そこで、観光企画の構成について、「学と術の分野」と「対象分野」とのクロス表を用いて整理する考え方を示した。

[参考] 全体の論理

原論 <企画>	戦略 <計画>	戦術 <手法>	周辺諸学 <情報>
観光研究			

次表は、川場村での実践を踏まえて作成した観光企画の整理表の一例で、横軸を「学と術の分野」(1. 人間、2. 政治・経済・社会、3. 文化・・・)、縦軸を「対象分野」(A. 家政、B. 空間、C. 運営・・・)としている。

「対象分野」の最初にある「A. 家政」は、川場村の人々の“家庭・家族”との関わりについての項目である。“夏目家の糠味噌”の取組は「A-1」に該当し、生活文化の中心事業となる。“校外学習”は「A-3」に該当する。

「B. 空間」は対象地域 (例では川場村) の様々なハードで、「B-1」には“徒歩圏”が該当する。歩行は体力の基礎として重要である。

「C. 運営」は様々なソフトで、「C-1」には

“人々の挨拶”が該当する。川場では、挨拶によってコミュニティが維持されている。

「D. 景観・環境」は対象地域の個別の景観や環境で、「D-1」には“川場の自然と人間の営み”、「D-6」には“誘導標示”(景観に配慮した新たな標示の提案)が該当する。

「E. 観光」では、オールド川場 (門前) とニュー川場 (田園プラザ) の整備が、「E-7」と「E-8」を中心に各分野に位置づけられる。

こうした整理により、観光企画では、地域の様々な要素が対象となることが示される。

観光企画の構成の整理表

学と術の分野 対象分野	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
	人間 心身 食生活 宗教	政治 経済 社会	文化 学問 芸術 教育	文明 技術 実学	空間 環境 景観	交通 移動 起点 終点	観光 (ハード)	観光 (ソフト) もてなし	歴史 年表	文献
A 家政										
B 空間										
C 運営										
D 景観 環境										
E 観光										

* 家政：一家の経済、家庭生活の手段と方法、生活の知恵
観光：観光者 (第一主体)、受け地 (第二主体)、観光産業 (第三主体)

◆観光企画関連報告3 (溝口周道)

平成に入る頃から従来型の観光地に対して、観光地の「磨き上げ」とか「磨き直し」という表現を目にするようになったが、「何をどのように磨くのか」と考えるようになった。また、バブルの崩壊、「本物志向」という人が増えたが、その人達はその「言葉の意味をきちんと考えて使っているのだろうか」と疑問を感じた。その頃から、「言葉を磨く」のが一つのアプローチとしてあるのではないかと考え、取組み始めた。

観光地づくりに活かすことを念頭に関係する言葉を磨いてゆくと、観光地づくりの基本的な方向や資源の活かし方が見えてくる。

[報告目次]

1. 言葉を磨く
2. 今道友信の「言葉磨き」、グレートブックス運動他
3. 上位の言葉、観光地づくりに関する一般的な言葉、観光地づくりの素材を表す言葉
4. 具体例

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■年末の特別講演会と懇親会

下記の通り開催いたしますので、奮ってご参加ください。

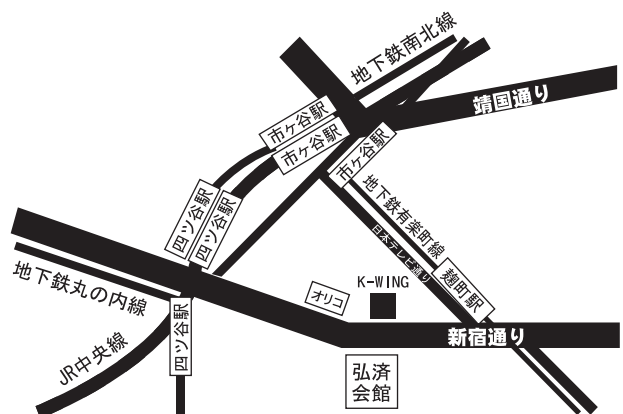
日 時：平成22年12月 6日（月）
 場 所：主婦会館プラザエフ（四谷駅前）
 特別講演会 17:00 - 18:00（地下2階 クラ
 ルテの間）（参加費無料）

ご講演者：国土交通省 鉄道局
 国際業務室長 江口秀二 様
 演 題：鉄道の海外展開の近況（ブラジル、
 ベトナム、カリフォルニアを中心
 に）
 懇 親 会 18:10 - 20:00（7階 カトリアの
 間）（参加費 3,000円）

（社）計画・交通研究会

会長 森地 茂
 副会長 石田 東生
 副会長 家田 仁
 副会長 屋井 鉄雄
 事務局長 水野 高信
 会報編集委員長 中井 祐

〒102-0083
 東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F
 TEL=03-3265-1774
 FAX=03-3221-5489
 E-Mail=
 jimukyoku@keikaku-kotsu.org
 Homepage =
 http://www.keikaku-kotsu.org/



（社）計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分
 弘済会館前の大きなビル（オリコ）の右隣、1階にドラッグストア（クスリ）の入った小さなビル。